

ダイヤモンドエレクトリックホールディングス（HD）が、成長に向け舵を切る。力を入れている顧客開拓と製品開発の成果を実らせ、2024年3月期には売上高1000億円（21年3月期比約4割増）と営業利益率4・5%（21年3月期は3・2%）を目指す。子会社2社のダイヤモンド電機と田淵電機の力を結集し、経営改革を図る小野有理社長に方針を聞いた。

# 反転攻勢 23年度売上高1000億円

ダイヤモンドエレHD社長 小野 有理 氏



開発している。子会社2社の技術を組み合わせることで、住宅と車に最適な「プロダクト(製品)ミックス」と『エネルギーミックス』を提案する。21年度は反転攻勢の年。開発をほぼ終えている製品もあり、新しい顧客調査する見通しで、開発火力発電所の電力に頼る現状では温室効果ガスは大きく減らない。「EVAが増えてても、内燃機関は残り燃費や出力に優れる点火コイルの役割は当分続く。点火コイルの販売は北米向けも復調する見通しで、開発

用点火コイル事業が苦戦し、売上高は前期比0・5%減の706億円の横ばいとなりました。田淵電機の大容量高コスト体質を生産高の課題だった低収益・点の集約で解消した。当期損益は当初予想では赤字だつたが、黒字で着地できた

「蓄電システムや電気自動車（EV）用車載充電器をはじめ、再生可能エネルギーを有効に使える新たな技術を、顧客の協力を得て開発している。子会社

「成績を示したい」  
—点火コイルはダイヤモンド電機の主力事業ですが、自動車の電動化で将来が不透明です。

や投資をやめる気はない  
——事業の再生や創出には、経営者の強い覚悟が必要です。  
「新たな事業は社長が直轄し、全権と責任を担つてある。衆知をい」

當陣はそれができずに失敗した。20年に実施した希望退職は残念だつた。再生ではトップが腕力を振るうほかな

任を取る。当社の旧経営者仲間を信じ、貢献め

# 再生工ネ活用技術 テコに

成長へ 次なる挑戦始まる

記者の目

小野社長がダイヤモンド電機の社長に就いたのは16年。点火コイルの米国独占禁止法違反で経営が悪化した時だ。18年からはダイヤモンドエレHD社長を兼務し、19年には経営再建中だった田淵電機の社長に就いた。現在は3社の社長を兼任する。再生請負人として仕事をやりとげ、成長という次の挑戦がこれから始まる。(大阪・田井茂)

—21年3月期はコロナ禍による自動車の販売減少で主力の自動車

子会社2社のダイヤモンド電機と田淵電機の力を結集し、経営改革を図る小野有理社長に方針を聞いた。

円（21年3月期比約4割増）と営業利益率45%（21年3月期は

製品開発の成果を実らせ、2024年3月期には売上高1000億

トリックホールディングス(HD)が、成長に向け舵を切る。力を入れて いる顧客開拓と